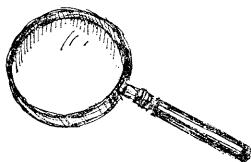


# わたくしの

## シルクロード ⑥



横張和子

### 綾絹のショール

今回で、シルクロードを西に、ようやくローマの領内に到着した絹について終回といたしますが、最後は絹のショールです。

絹の肩掛けは紀元一〇三年に建てられたエラハベルの塔の一階で発掘されました。ショールは最も単純な形ですが、さまざまな用途で使われます。例えば気温の暑さ寒さに合わせて衣服の補助に、あるいは装身具の一つに、あるいは宗教的、儀礼的な用途のために女性の間では少なからず重要な役目と意味合いをもつものでした。バルミーラの貴婦人もショールは正装の一部であつたらしく、着飾った装いにショールを被つている胸像があります。

バルミーラの墓から出土した織物の中でショールと思われるものがいくつもありますが、多くが亞麻布で、それが一般的なものであったようです。亞麻布つまりリネンですが、織り方は平織です。経糸と緯糸の密度がどちらもほぼ同じですから、中国の平絹のように経糸の密度が緯糸の一・五倍から二倍で布面が畝地様になるそれとは異って、当り前の平織ですが、このようなところでも東西の織物觀の相違、エスプリの違いといったものを感じます。織物の歴史は新石器の時代にはじまるときされていきます。人類が

原始の狩獵や採拾の生活に終りを告げて、穀物を栽培し、家畜を飼養する農耕時代に入ると、植物から纖維をとり、羊から毛を梳いて糸を紡いだりして、織物を織る術を考え出しました。これは人類のみが為し得る方法で、人類に普遍的な發明でありました。が、織物の種類は人々が生活する地域で主に手にし得る材料に強く支配されて、それぞれ独自なものを作り上げ、人々の生活に密着して長い間続けられました。中国では古くから、およそ四千年も前から絹を使うことができたと考えられています。中國以外の人々が絹を己がものとし得たのは、中国の創始から二千年前後のことです。その間中国は絹を厳しい監視の下に、国外持ち出しを禁じ、専ら独占するところでした。パルミラの絹もそのような状況の下に東方の商人から時には金の重さに同じ割合で取引されて、手にしなければならなかつたのです。にもかかわらず、中国の絹が西方人の熱い憧憬の的であったことは、これまで何度もお話ししていますが、西方人もまた、かれらの織物の材料をもつっていました。パルミラの商人貴族の墓から出土した織物では西方人の織物といえるものは毛織物と亜麻布です。これらを實際にみますと、織物としては、目をみはるほどによくできます。それは中国の織物に十二分に競合し得るほどです。その一つをご紹介したいと思いますが、それらを一堂に見わたした

とき、東方の絹と西方の毛織物と亜麻布は全く異にした織物のイデーに成り立つてゐるよう思えます。

平織という織り方一つとっても、中国の場合には経糸が多くて縦糸を被つて布の面に横の畝文ができます。これに対して毛織物にはわたくしどもが縦織といい、西洋人がゴブラン織という手法の平織が使われていますが、これでは縦糸が経糸より圧倒的に数が多くて、経糸が全くみえないまでに被つてしまっています。ですから布の面には中国の敵織とは逆の従の畝文ができます。亜麻布では先にもいいましたように経糸も縦糸も同じような中位の密度できわめて一般的な平組織を作っています。このようなことがどうして生じてくるかと言えば、それは今述べたようなそれが手にし得る材料の特質がもたらしたもののです。

絹は蚕繭を湯で煮て糸口をみつけて、糸を繰りとります。これが生糸です。その纖維の長さは八〇〇メートルから一〇〇〇メートルもあります。極めて彈力性に富んでいて、鋼の線にも匹敵するそうです。また絹糸は生糸では纖維の束のまわりに絹の膠質（セリシン）がとりまして纖維の結束を固めています。長く、伸張に強く、糸の表面が滑らかであるということは絹糸にはまことに都合がよいことです。織物では経糸を奇数糸と偶数糸に二分し、上下に分つことによって縦糸の入る杼道を作りますが、その

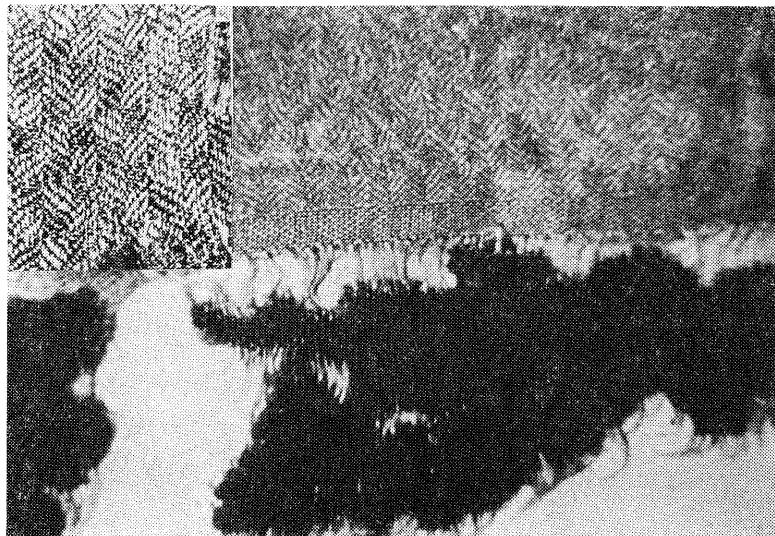
都度絹糸は鱗の糸と接触して上下します。絹糸の場合、特に生糸の場合にはそれは余り苦にならない最大の利点をもっています。それゆえ中国の綿織物は常に絹糸が重要視されて、絹糸で模様を作ったり、また絹糸ばかりがみえる横畝地合の織物（例えば、塩瀬羽二重や博多織のようなもの）が伝統的に作られました。技法も平織が専らで、綾織は古い時代には考案出されていなかつたのではないかと思います。

これに対して西方の材料の主なものは羊などの獸毛です。中国で羊の飼養が得意であったとは聞いていません。しかし渭水を渡れば西域です。絹糸圈から川一つ距ててそれより以西はもはや羊毛圈です。旅行しても食卓には羊肉がさまざまに料理されて出てきます。羊は西の人たちにとってはまことに重要な生活の糧ですが、羊毛はまた織物の材料となりました。その作品のよい出来ばえは先にも述べた通りですが、羊毛の纖維は絹とは多くの点で違っています。毛糸は短かな纖維で、それ 자체は糸としての用をなしませんから、これを紡がねばなりません。それにかなり強い搓りをかけなければ伸張に耐えられません。西方では撓りは右上から左下に流れるZ撓が普通ですが、地方によつてS撓もあり、地方々々の慣習があつたようです。毛糸の纖維の表面は鱗片状で、そのため摩擦に弱く、すぐ毛ばだつてしまい、絹糸には都合のよ

い条件をもつていません。摩擦の度合を弱めるために絹糸の間隔を広くとつて、その代りに縫糸を密に織り込む綾織が、また摩擦の回数を少くするために綾織の方法が考えられました。平織では絹糸と縫糸は毎度一対一に交錯しますが綾織ではその二分の一あるいは三分の一の頻度で交錯するのです。すると布面では織目が斜行してあらわれます。

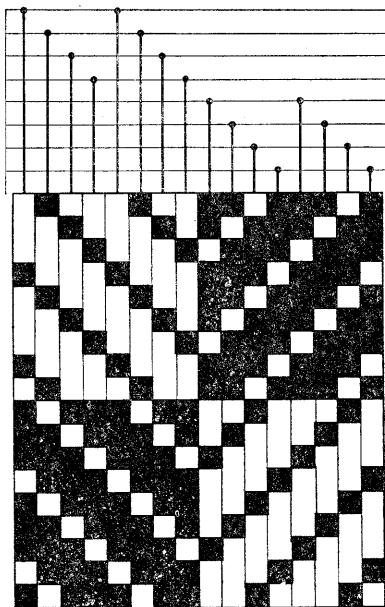
このように東方の織物と西方の織物とでは少くともパルミュラの時代、すなわち後漢時代（紀元二五〇—二二一）では相方で著しい相異をもつっていました。

このような状況の中で、パルミュラ出土の絹のショールは大へん興味深いものです。それは細やかな織りの地をもつています。（図1）よくみると絹糸と縫糸の交錯を一対三にした斜文組織によつていています。細かな碁盤模様にみえるのは綾織を作る浮糸が絹のものと縫のものが交互に組み合わされているからです。（図2）つまりこれが興味深いのは毛織物の組織が絹に応用されていることです。このことは二世紀ごろからシリアで絹を織つていたことの証明ともなります。絹は中国の家蚕の糸であるということです。先に言いました「エリコトウーラ案内記」にも中国の生糸がインドの港を出航してローマに運ばれたことが記されていますから、西方人は絹の扱い方にほか



▲図1 紫の帯意匠のある綾織の絹のショール断片

►図2 綾絹のショール組織—経緯の四枚綾の組み合わせ



り慣れていたものでしょ。この綾織のショールの絹糸には撚りがなくて、しかも絹の膠質（セリシン）も落されていて、絹織維があらわれて、二千年も近く経つたといふのに、やや黄ばみはあるものの絹特有の美しいややかな光沢は失われていません。やわらかに織り出された綾織は優しい感触をたたえていますが、その淡いクリーム地に、上品な紫の帯の意匠が三十センチほどの間隔を開けて、二本織り込まれています。経糸に水平な横の縞模様です。この部分をよくみると、先に述べた西方の手法が用いら

れています、つまり絹糸を疎にして、緯糸を密に織り込む綴織の方法です。写真にもみえるように絹の綴織は紫の綴織に入る前に平織に変えられています。この平織では絹の絹糸は二本ずつにまとめて、そこに一越の緯糸が入っています。しばらく絹で平織されてから紫の緯が密に織り込まれていきます。

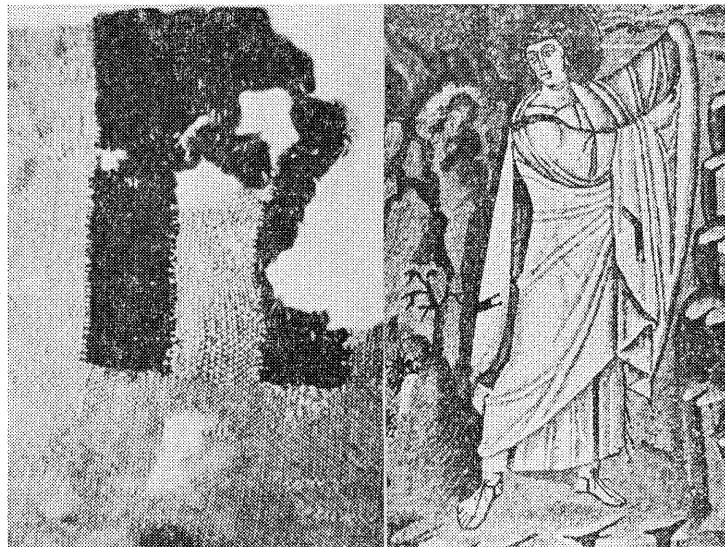
淡い黄味がかった白と赤味のある深い色の紫の取り合わせは派手々らしいものではなくむしろきわめて高雅な趣きですが、その美しさを一層増幅しているのは何といつても用いられている材質の良さでしょう。紫に染めつけられた羊毛糸は右上から左下に流れる擦のかけられた細い極く上質のものです。またその紫は地中海に臨むフェニキアのティル Tyrus やシドン Sidon の海岸で採れる紫貝ムレックス・ブランダリスから得たものです。有名なティリアン・ペーブルですが、当時紫は藍に赤い染料を混ぜて作る偽ペーブルも流行していたのですが、ペルミニラのものは例外なく紫貝の純粹ペーブルであることが確かめられています。貝紫は一五〇〇〇個の貝から僅かに一・四グラムしかとれなかつたといわれます。それゆえ頗る高価な染料であったのです。貝紫の羊毛糸は西方からペルミニラを中経して東方に送られました。ペルミニラのアゴラ（公衆広物）から発見された紀元一三七年のハドリアヌス帝のバルミニラ関税表（碑文）にはこの貝紫の極上の羊毛

糸がフェニキアの方から入つてくる時また出る時のいずれにも同額の関税が課せられたことが記されています。これに対しても、絹については何も記されていないということです。その理由は明らかであります。ここに到着した東方の絹をローマができるだけ安く手に入れるべく、課税の対象にしなかつたのだろうと解釈されています。

ペルミニラ出土の亞麻布や毛織物にはこの紫の糸を緯にして綴織する意匠が大へん多いのです。それは装飾のためというより、宗教的な象徴性をもつものでした。ペルミニラでみた紫の意匠は旧約聖書の重要な人物の衣服と無関係ではなく、五・六世紀のラヴェンナのサン・ヴィターレ寺院 Ravenna Saint-Vital やローマのサンタ・マリア・マジョーレ寺院 Rome, Eglise Santa-Maria-Maggiore のモザイク壁画にそれをみるとことができます。（図3）ペルミニラはかれらの宗教としてペルミニラ神があり、またミトラやペールの神もあつてさまざまな宗教が混淆していましたが、特にユダヤ教徒でもなくまたキリスト教徒でもなかつたのです。ペルミニラの衣裳のその紫の意匠については少しく調べてみたいと思つています。

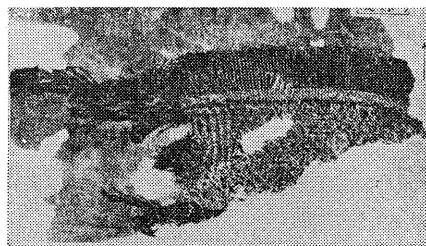
小断片ですが、紫の綴織に横縞に金糸を織り込んだものがあります。（図4）金糸は絹糸を芯にしてまわりに金の箔の細い繊片

をまきつけたもので、美しい紫の間に純度の高い金の輝やきがみえかくれしています。派手々々しさはありませんが贅を凝らした

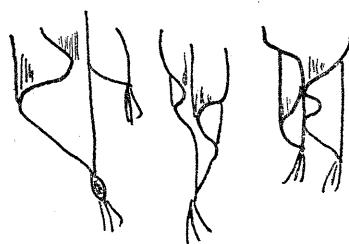


▲図3 マントラーに織り出された紫意匠

左: パルミラ出土の毛織物断片 右: モーゼ聖ヴィタール寺モザイクランヴェンナ 6世紀



▲図4 金糸が織り込まれた紫意匠



▲図5 ドウラ出土のシナゴーグ壁画に  
みえる房飾り

意匠です。こうした紫の綴織の意匠では紫の縫糸を長くのばして裁ち切り、房飾りのようにするものがあります。これは旧約聖書の一節、神エホバがモーゼに告げた誠命の一つを想起させることになります。

「イスラエルの子孫に告げ、代々その衣服の裾に房をつけ、その裾の房の上に青い絹をほどこすべし」とこれを命じよ。この房は汝らがこれをみて、エホバの諸々の誠命を記憶してそれを行わしめ、汝らをしてほしいままでする自己の心と目の欲に従うことがないようにするためである」(民数紀略十五章三七～三八)。これ

は先ほどのモザイク壁画にも見出せます。またシリアのもう一つの遺跡、パルミュラより東のエウフラテス河に臨む軍地的な町であつたドゥラ・エウロボスから発掘された三世紀のユダヤ教の寺院 Synagogue の内部を飾つていた壁画にモーゼ、ヨンニュア、エレミアと考えられる重要な人物にはこの房飾りが見出せます。(図5) このように西方の衣服の慣例の中とりこまれた中国の絹は二世紀ごろから西方人、中国では胡人といいましたが、かれらの手によつてかれらの織物が作られていたというわけです。中国人はこれを叙して「常利得中国糸解以為胡綾」といつています。つまり中国の絹を得るとそれを解いて再びかれらの綾を織るといいのです。この綾の組織を見るといわゆる四枚の綜続をもつて織り出される四枚綾といわれるものです。これに対して後代のササン朝の緯綿にみられる綾組織は綜続が三枚の三枚綾組織です。この違いはパルミュラの“胡綾”が中国の織物の組織をそのまま用い、ペルシア錦が本来西方で行われていた綾組織をもつて行つたところにあるのではないかと考えています。西方の人々は絹を綾織する時には中国人が行う糸遣いつまり模様を作る浮糸を作る場合の糸を三本沈いて一本に沈ませるその法を忠実にまもつたらしいことがうかがわれます。これは中国の織物の基本が平織であるために、いわば必然的に生じてくるものであったのです。これに対し

て三枚綾ははじめから綜続の数が三枚(奇数)であつて、中国には奇数で綜続をそらえることはしなかつたからです。ですからパルミュラ綾も本来ならば三枚綾で織られるべきものであつたかもしれません。しかし四枚綾をもつてしたことはやはり中国絹への傾倒でもあつたのでしょう。このような四枚綾の綾絹は実は四五世紀の地中海地域から近東にかけて非常に流行したそうです。それは余り知られていないなかたことですが、最近の研究者の発表がありました。中国と西方では考え方を異にし、中国絹はその素材は喜ばれましたが、その模様や意匠はかれらの文化、かれらの生活の中には溶け込んでいかなかつたようみえます。

中国の絹が盛んに西方に流出していきましたが、ではそれが西方でどのように受け入れられ、どのようにして用いられたかということになるとまだよく分つていないのです。パルミュラの綾絹は一つ、そのよい例にはなります。そしてそれが紫の意匠を織り込んでいてその西方的変容のうちに、いくつかの関連的な知見が得られました。中国絹はパルミュラの胡綾からもう一つ発展し、新局面を展いていきます。その最も華麗な展開が、これまでしばしば触れてきたササン朝ペルシアの錦です。次回からはわが国の正倉院の錦とも深いかかわりのあるペルシアの錦をめぐることが、山脇女子短期大学について書かせていただきましょう。